

## ベルクソンにおけるテキスト解釈学

我々は著者の直観を追うべきなのか

長谷川暁人(愛知県立大学)

本論は、ベルクソンにおけるテキスト解釈のあり方をディルタイおよびガダマーと比較することによって、より整合的に理解しようとするものである。

ベルクソンは『思想と動くもの』において、自らの特異な解釈論を展開している。それは、作者の直観に迫る、という方法である。ベルクソンはそこでスピノザやバークリを例に挙げ、テキストそのものを分析的に読むのではなく、ある種のイマージュを思い浮かべることによって間接的に著者自身の直観を捉えることを重視する。

こうした解釈論は、ベルクソンの持つ言語観に由来するものであると言える。ベルクソンは言語は持続を空間化してしまうものであり、それによって持続の持つ流動性や連続性を固定化し、断ち切ってしまうものであると考えていた。ゆえに、テキストを分析的に読むということはベルクソンにおいてテキスト解釈の十分条件を構成することはないのである。

しかし、ベルクソンが後に同様な分析や空間化・固定化を生業とする科学にもある種の無機物質に対する絶対的認識の可能性を認めたように、言語にもまた同様の価値を認めている、と考えることもできるであろう。ならば、分析的な読みは退けられるだけのものではなく、イマージュを想起する読みと相補的なものとして定立されることによって、ベルクソンにおける解釈論を構成することになるだろう。

ところで、こうしたベルクソンのテキスト解釈に対しては、二つの疑問が必然的に生じてくる。それは①ベルクソンのテキスト解釈は、作者の直観との絶対的な一致を可能にするものなのか、そして②テキスト解釈の対象となっているのは、そもそも本当に作者の直観なのか、という点である。

上述の①に対してはベルクソン自身、例えばシュヴァリエとの対話において絶対的な一致を含意するものではない、と語っているし、またベルクソンの著作からもそうした態度を読み取ることができる。一方で、テキストを分析的に読むだけではたどり着くことのできないある種の絶対性に近づくことができる、とも考えているように思われる。

そして②については、少なくともベルクソンの論旨に沿って読む限り、明らかに解釈の対象は作者の直観であるように思われる。この場合、現在の解釈学の水準から言って、一つの大きな問題が生じる。それは、解釈とは作者を越え出ていくものであり、書かれたテキストは作者の直観をただ表現しているだけでなく、むしろそれを凌駕している、という常識的な了解ができなくなる、ということである。もし作者の直観に迫ることが目的なのであれば、作者が意図しないものをテキストに読み込むことは全て誤読であるということになってしまう。

そこで、ベルクソンのテキスト論を現代的に読み直すために、まずはディルタイのテキスト解釈学を援用することにする。ディルタイもまた、テキストは文字によって固定された生の表示である、というベルクソンに似た発想を持っていた。そしてまた、ベルクソンがある種の持続一元論によって、自らの持続と他者の持続の一致を想定するように、ディルタイもまた人間本性という普遍的なものに基づいて解釈者と作者の個性が比較可能なものとして現れてくるのだと考えていた。

だが、ここでディルタイはベルクソンと明らかに異なる発想を提

示する。それは、解釈の目的は著者を著者と同じように理解することではなく、むしろ著者以上によく理解することである、と語ることである。こうした、解釈者が著者を越え出る、という発想は少なくともベルクソンのテキストに明示的に示されているアイデアではない。ディルタイは、例えば詩人の言葉によって解釈者のうちに呼び起こされた体験が、元の詩人が持っていた意識以上のものを芽生えさせる、と考えていた。このディルタイの視点が、ベルクソン解釈論にとって、テキストの著者からの独立とその射程の広さを保証するものとなるだろう。というのも、ベルクソンは基本的に言語を持続や直観を固定化・空間化したもの、すなわち矮小化したものと捉えているわけだが、しかしそれは質が変容させられているものであって、持続とは異なる質的存在であるとも考えられるからである。そもそも、ベルクソンの解釈論において求められるイマージュは解釈者によって異なる。こうした異なる解釈の可能性を許すということは、言語化されたテキストがただの持続の固定された表示ではなく、むしろ質的に異なる存在であるということの証明ではないだろうか。

こうして、ディルタイ的な作者の心情—テキスト間の関係性をベルクソンに持ち込むことにより、我々はベルクソン解釈論をより深く定義することができるであろう。

一方で、ガダマーはディルタイ的な解釈学の枠組みそのものを批判する。ガダマーにとっては我々が解釈すべき対象はそもそも著者の心情や直観ではなく、あくまでテキストの意味だからである。作者と解釈者との立つ地平の違いを強調するガダマーにとって、両者の心情の一致というベルクソン・ディルタイ的なアイデアは受け入れがたいものとなるであろう。

この点は、やや杓子定規な見方となるが、いわば生の哲学とも言うべきベルクソンおよびディルタイとガダマーが袂を分かるところである。本論では、ガダマーのこの点については深入りしない。我々はベルクソンの共感の立場から、テキスト解釈を考えていく。

とはいえ、ガダマーにも汲み取るべき多くの着眼点がある。それは、解釈の循環構造と、作者とテキストの関係である。ガダマーは前述の、異なる地平およびその融合という発想から、解釈者とテキストの間には終わりのない循環構造があると考えている。解釈においてこうした地平の違いを設定しないベルクソンにおいては、同様の循環は存在しないが、一方でテキストの分析的な読みとイマージュを求める読みの間には限りない往復運動が求められているとも言える。

そしてまた、作者はそのテキストの最も適切な解釈者ではありえない、ということも導かれる。この点はディルタイと一見似ているが、ガダマーにおいてはテキストが示された意味に過ぎない以上、この乖離はより根本的なものである。果たして、我々は自らの作品・テキストにどのように向き合うべきなのか。この点も、上述したようにベルクソンが想定する作者の直観と固定化された記号・言語の総体であるテキストの関係を考察する上で大きく寄与するであろうと思われる。

以上のように、ベルクソンにおけるテキスト解釈論を定義したのちに、ディルタイ・ガダマーのとなえる解釈学から有益な示唆を得て、「ベルクソンにおいて、テキスト解釈はどのように考えられるのか」を検討することが本論の目的である。これは単にベルクソンにおける一つの研究領域を成すだけでなく、我々が今ベルクソンを読むとはいかなることなのか、という根源的な問題意識にも通ずるものである。